

スカシユリの二度切り栽培(2)

誌名	茨城県園芸試験場研究報告
ISSN	0387186X
著者	浅野, 昭 高津, 勇 増尾, 重治
巻/号	12号
掲載ページ	p. 29-36
発行年月	1984年3月

スカシユリの二度切り栽培(第2報)

第一作目の栽培方法と切下球の発芽,
開花および切花品質

浅野 昭・高津 勇・増尾重治

Studies on Double Cultivation of *Lilium elegance* (2)

Effects of the First Cultivative Method on the Sprouting,
Flowering and Quality of Cut Flowers of Second Bulbs

Akira ASANO, Isamu TAKATSU and Shigeharu MASUO

Summary

1) For the purpose of practical application of the cultivating technique of double-harvesting of *Lilium elegance*, the effects of the temperature which cooled the bulbs before they were first planted, forcing of night temperatures and the period of cooling the later planted bulbs on the sprouting and blooming, and on the quality of the cut flowers, were investigated.

2) In case of 'Kiyotsubeni', many of them did not sprout, though some grew to bloom. Therefore, we decided to study further the breaking of dormancy.

3) The results were almost the same with 'Kinsen' and 'Akenishiki'

a) The forcing of night temperature when the first bulbs were planted, had a strong influence over the sprouts and the flowering stems which grow out of the second bulbs. However, when the temperature we kept at 14°C, there was no influence whatever. But at 8°C and below, cooling temperature began to have some effect on the decrease of the number of the sprouts produced from the second bulbs. Also when cooling temperature was kept at 5°C, the number of the sprout decreased notably.

For suitable sprouting and growth, the cooling period of second bulbs has to be longer than seven weeks. However, the cooling period of second bulbs, hot-water treatment and pre-cooling need to be further investigated.

b) The lower the night temperature when bulbs were first grown, the higher the quality of the cut flowers. 'Kinsen' bore a large number of buds when it was cooled at 5°C.

c) In terms of cut flowers, both 'Kinsen' and 'Akenishiki' can be expected to be of some market value. However, we perceive a need to continue further systematic investigation in order to upgrade the quality of cut flowers.

緒 言

キクやテッポウユリにおいて実用化されている、切下株(又は切下球)を用いた二度切り栽培技術をスカシユリでも実用化するために、前報では、第一作目を栽培する際の球根の冷蔵温度、栽培夜温、球の大きさ及び作型等によって切下球の肥大性がどの様に変化するか、肥大性の良い品種の選定等について検討し、切下球の肥大性は品種間差が大きい、金扇、清津紅、明錦、越の輝などの品種で、400~450球/

ケース(40g以上)の大きな球根を用い、比較的低い栽培温度で、期間をかけた作型で第一作目を行うと大きな切下球が得られることなどを報告した¹⁾。

今回は切下球を用いた二度切り栽培において、発芽、生育を順調に進めるための、第一作目の球根の冷蔵温度、栽培夜温、および切下球の低温処理期間等について報告を行う。

試験Ⅰ 第一作目の球根の冷蔵温度、栽培夜温と切下球からの発芽、生育

1 試験方法

金扇(350球/ケース, 67g), 明錦(450球/ケース, 41g), 清津紅(400球/ケース, 50g)の3品種を用い、加湿したオガクズに球根を埋め、1980年10月7日より14℃, 2週間の予冷後、湿度を5℃及び8℃で8週間の本冷を行い、12月16日、60×33×12cmの木箱に3品種を6球ずつ、計18球を植え、1区当り4箱を用いて第一作目の栽培を行った。栽培夜温は14℃, 8℃(以上ガラス室), 0℃(アクリル無加温室でビニール等保温資材を用いて温度の確保に努めた)とし、日中は最高23℃前後で天窓を自動開閉させた(清津紅は一部処理区、欠落…第1表参照)。地上部は開花1~3日前に収穫し品質を調べ、地下部に残った切下球は各区毎に収穫調査が終了した後、清津紅の8℃区4月13日、0℃区4月27日、金扇、明錦の14℃区4月13日、8℃区5月7日、0℃区5月12日にそれぞれ掘り上げ球重を測定した。続いて順次切下球をポリ袋に入れ、2℃の冷蔵室で115~150日間貯蔵した。9月5日一斉に冷蔵室から貯蔵していた切下球を取り出し、アクリル無加温室に15×10cmの6条植えて定植した。日中の高温、強い光線为了避免のため、ベツト上約1mの高さによしずを被覆した。

2 試験結果

第一作目の開花および切花品質は第1表に、切下球からの発芽、生育状況については第2表に示した。第一作目の生育、開花、切下品質は第1報の試験Ⅲで論じたので、ここでは省略する。

第1表 第一作目の冷蔵温度と栽培夜温が開花、切花品質、切下球重に及ぼす影響

供試 品種	冷蔵 温度	栽培 夜温	開花日	到花 日数	切花重	草丈	着花数	葉数	切下 球重	減少率 [※]
	℃	℃	月日	日	g	cm	個	枚	g	%
金	5	14	4. 3	108	69	65	5.2	166	41	39
	8	14	4. 3	108	60	61	4.2	148	34	49
	5	8	4. 20	125	63	64	5.2	156	38	44
	8	8	4. 22	127	55	59	4.2	151	43	36
扇	5	0	5. 3	138	80	77	5.9	144	35	48
	8	0	5. 2	137	62	67	4.5	142	40	40
明	5	14	4. 10	115	54	52	4.3	91	28	32
	8	14	4. 13	118	48	50	4.0	87	27	34
	5	8	4. 24	129	63	64	4.6	93	32	28
	8	8	4. 30	135	55	55	4.0	90	32	28
錦	5	0	5. 2	137	69	71	5.0	92	32	28
	8	0	5. 2	137	64	69	4.0	88	34	17
清 津 紅	8	8	4. 2	106	35	53	2.9	76	31	38
	5	0	4. 10	115	55	63	3.8	81	32	36
	8	0	4. 12	117	45	63	3.1	76	32	36

※ 定植時の球重を100、掘り上げた切下球の減少割合。

第2表 第1作目の冷蔵温度、栽培夜温が切下球利用による第2作目の諸形質に及ぼす影響

供試 品種	第1作目		第2作目							発芽数	発蕾茎数	開花茎数	開 花 率
	冷蔵 温度	栽培 夜温	発芽	発蕾	開花	草丈	切花重	花数	葉数	定植数	発芽数	発芽数	
	℃	℃	月日	月日	月日	cm	g	個	枚				
金 扇	5	14	9.14	10.2	11.8	78	37	3.18	48	26/24	26/26	21/26	81
	8	14	9.15	10.5	11.11	79	35	2.48	46	30/24	28/30	23/30	77
	5	8	9.23	10.8	11中~下	83	41	3.00	62	22/24	19/22	17/22	77
	8	8	9.24	10.10	10下~11下	72	36	2.89	50	28/24	26/28	22/28	79
	5	0	10.3	11.4	11下~12上	76	-	3.63	45	13/24	10/13	10/13	77
	8	0	9.26	10.29	11下~12上	78	-	3.44	49	22/24	18/22	17/22	77
明 錦	5	14	9.25	10.24	11下~12上	56	-	1.52	-	44/24	30/44	29/44	66
	8	14	9.24	10.20	12上	55	-	1.56	-	46/24	26/46	23/46	50
	5	8	10.6	11.7	12上	54	-	1.92	-	29/24	13/29	12/29	41
	8	8	9.24	10.22	12上	64	-	2.17	-	27/24	25/27	24/27	89
	5	0	9.28	-	12中	49	-	2.00	-	7/24	3/7	3/7	43
	8	0	9.30	10中下	12中	54	-	2.07	-	23/24	16/23	15/23	65
清 津 紅	8	8	9.16	10.10	11.4	62	21	2.59	36	21/32	18/21	17/21	81
	5	0	9.30	10下~11下	11上~12中	83	30	3.33	49	5/32	3/5	3/5	60
	8	0	9.27	10.14	12上~下	62	21	2.36	39	16/32	13/16	10/16	63

金扇の発芽、発蕾、開花は第一作目の栽培夜温が高いほど早く、また栽培夜温を14℃又は8℃とした時8℃で冷蔵するより5℃で冷蔵した方が僅かながら早く生育が進んだ。しかし栽培夜温を0℃とした時は逆に5℃冷蔵より8℃冷蔵で早い生育を示した。

次に区当りの発芽数は栽培夜温が高いほど多く、5℃冷蔵より8℃冷蔵で多い。そしてその差は栽培夜温が低くなるほど大きくなった。発芽数に対する開花茎数の割合は各区とも77～81%で差が見られなかったが、開花茎数は発芽数と同じく栽培夜温が高い方が多く、冷蔵温度は5℃より8℃で多くなった。

開花時の草丈は処理による一定の傾向は見られず、また1茎当りの着花数は第一作目の冷蔵を8℃で行うより5℃で行った方が多くなり、特に栽培夜温を0℃とした時に最も多くなった。

明錦の生育は金扇より全体に遅れた。栽培夜温による生育の早晩はあまり明らかでなく、冷蔵温度では、各栽培夜温区とも5℃より8℃で僅かながら生育は早く進んだ。発芽数は金扇と同様の傾向が見られた。発芽数に対する開花茎数の割合は、栽培夜温を14℃とした時は5℃冷蔵で高率となるが、栽培夜温を8℃又は0℃に下げると、冷蔵温度に対する反応は逆に5℃より8℃で高率の開花率を示した。

開花時の草丈は処理による差がほとんど見られないが、着花数は栽培夜温が14℃の時やや少なかった。

清津紅は一部処理区が欠けているので十分な検討にならないが、栽培夜温を0℃とした時は金扇、明錦と同様の反応を示し、発芽数や着花数は5℃冷蔵より8℃冷蔵で多くなった。

3 考 察

第一作目の冷蔵温度及び栽培夜温と切下球の発芽、生育の関連を検討した。この試験で供試した切下球は、第1報の試験Ⅲの一部で得たものなので、第一作目の生育・開花状況についての議論は今回は一切省略する。

テッポウユリの二度切り栽培において、第一作目の栽培夜温及び日長について検討し、切下球からの発芽・開花率・開花の早さ等は第一作目の栽培夜温の影響を受け、特に20℃以上の高温で栽培されて得た切下球は発芽が早まるという結果を得ている⁷⁾。今回の試験とは設定温度が違うが、栽培温度の影響を受けるという点での一致点がある。

この試験ではスカシユリの抑制栽培に相当する作型、つまり球根を長期低温貯蔵し盛夏過ぎに栽培を開始する作型で、スカシユリの切花生産は量的に少ない時期に当り、スカシユリとしての本来の品質を多少下回っても、市場性はかなり期待出来る時期である。

清津紅は処理区が完全でないので十分な検討結果にならないが、着花数が3輪の切花が11月～12月に得られており、市場性は十分あると判断される。

金扇と明錦は冷蔵温度と開花の早さの点で一部品種間の差は見られたものの、発芽数や開花茎数については一致した結果が得られた。2品種とも栽培夜温が高いほど発芽とその後の生育は早く進んだ。また夜温14℃の時は冷蔵温度5℃と8℃の間で発芽・生育に差は見られないが、夜温が8℃や0℃に下がると冷蔵温度によって発芽数や開花茎数に差が生じるようになった。第一作目が終了し、切下球を掘り上げた時点では、切下球の分球が未発達のため分球数の調査は行えなかった。従って、第一作目の栽培夜温や冷蔵温度と分球数の関係は必ずしも明確に出来なかった。そして14℃の高温で発芽数が多く、8℃、0℃と温度が下がる程発芽数が少ないのは、分球数そのものの差なのか、又は分球数は同一であっても、切下球の休眠性に差が生じ、発芽数に差が生じたのか、ということは明らかに出来なかった。

開花期の正確な調査は行わなかったが、無加温ハウスでの栽培のため、気温の低下と共に開花は遅れ、しかも不揃いとなった。しかし発蕾した個体は開花まで到達しているため、室温を確保することによって開花の揃いも良くなるものと思われる。なお別の試験で、金扇を用い3月に第一作目の開花を終えた切下球を0℃で長期貯蔵し9月～11月に定植し、栽培夜温を8～15℃で栽培した結果、約110日後に開花を確認している³⁾。

金扇の切花品質は草丈70～80cm、着花数2.5～3.6輪あったので市場性は十分期待出来るものと思われる。一方明錦はやや草丈は短かく着花数も約2輪で、市場的価値はやや低いと思われる。なお切花品質は第一作目を低温で栽培するほど良く、金扇では冷蔵温度を5℃としたとき着花数が多かった。

今後の問題であるが、切下球からの切花品質を高める方策として、第一作目の球根をもう少し大きなものを用いること、切下球からの仕立て本数の制限などが考えられる。キクやテッポウユリの二度切り栽培では、株(球根)当たりの仕立て本数を2本前後に制限することによって、光環境を改善し、切花品質の向上を図る効果が見られている^{5),7)}。

今回の試験では、切下球から抽出してくる茎を全て仕立てる栽培法を用いたが、この点の検討を加えることによって切花品質向上は期待出来る。

第一作目の栽培夜温を0℃とした時、特に5℃で球根冷蔵を行った区で発芽数が少なかった。前述の様に分球数の問題も考えられるが、切下球の休眠性の問題として考えた場合、この試験では切下球を掘り上げ、温湯処理や予備冷蔵を行わず、ポリ袋に入れた切下球を0℃室に持ち込んだ。テッポウユリやスカシユリにおいて、発芽性を高め、生育を早める効果を期待して、温湯処理や予冷が実用化している^{4),8)}ので、この処理を加えることによって切下球の発芽性の向上、開花の促進は期待出来る。

さらに今後の問題として、栽培の全期間のうち、どの程度の高温をどの程度の期間保持し栽培を行えば良いか等の検討もぜひ必要と思われる。

試験Ⅱ 第一作目の栽培夜温と切下球の低温処理法

1 試験方法

試験Ⅰと同一の品種、球根を用いて、第一作目の冷蔵を1980年10月7日より14℃、2週間の予冷後本冷を2℃、8週間行い12月16日、60×32×12cmの木箱に18球ずつ植え、栽培夜温を14、8、0℃として栽培した。試験Ⅰと同様に切花や切下球の調査を行い、温湯処理や予冷を行わず、切下球をポリ袋に入れ本冷を2℃で、3、5、7、9週間行い、本冷終了後順次第一作目と同じ木箱に15～20球ずつ、2反復で植え（品種毎の定植日は第4表参照）、ガラス室内の黒寒冷紗（井610）被覆下で生育させた。

なお第一作目の0℃区はアクリルハウス内でビニール等の保温資材を用いて温度の確保に努めた。

2 試験結果

第一作目の開花期、切花品質および切下球重などは試験Ⅰの第1表に示した通りである。その結果については第1報の試験Ⅳの中で述べているので今回は省略するが関連する部分だけを第3表に示した。

切下球からの発芽・生育状況は第4表に示した。清津紅は試験打ち切りの10月下旬までの間には全区とも全く発芽してこなかった。

金扇は7月下旬から10月下旬にかけて順次開花した。第一作目の終了を持って、次々と切下球を掘り上げ、所定の冷蔵を行って定植していったので、第一作目の栽培夜温が高いほど切下球からの開花時期も早くなったが、切下球の定植から開花までの所要日数を見ると、第一作目の栽培夜温14℃と0℃で得た切下球では、冷蔵期間が長くなるほど所要日数は短縮されたが、7週間冷蔵と9週間冷蔵の差は見られない。

第3表 第一作目の栽培夜温が開花、切花品質および切下球重に及ぼす影響

供試 品種	採 培 夜 温	開 花 日	到 花 日 数	切 花 重	草 丈	着 花 数	葉 数	切 下 球 重	※ 減少率
	℃	月日	日	g	cm	個	枚	g	%
金	14	3.30	105	73	70	5.2	161	44	34
	8	4.18	123	72	71	4.9	152	37	45
扇	0	4.26	131	83	75	5.9	152	34	49
明	14	4.8	113	60	59	5.0	93	25	39
	8	4.27	132	53	61	4.0	90	29	29
錦	0	5.1	136	61	71	4.6	91	29	29
清 津 紅	14	3.18	92	41	55	3.6	82	31	38
	8	3.31	105	35	53	3.6	83	32	36
	0	4.11	116	57	68	4.0	80	33	34

※ 定植時の球重を100、掘り上げた切下球の減少割合。

第4表 第一作目の栽培夜温およびその切下球の低温処理期間が開花、切花品質等に及ぼす影響

第1作目		第2作目										
供試	栽培	低温	定植日		開花期の幅	草丈	切花重	花数	葉数	発蕾茎数	開花茎数	同割合
品種	夜温	期間	月日	月日		cm	g	個	枚	発芽数	発芽数	%
	°C	週間	5. 6	8. 8	7/29~ 8/25	60	26	2.0	61	23/32	23/32	72
金	14	3	5. 20	8. 11	8/ 3~ 8/31	55	27	2.1	54	22/35	17/35	49
		7	6. 3	8. 17	8/10~ 9/ 1	61	25	1.8	54	40/44	17/44	39
		9	6. 17	8. 30	8/21~ 9/13	54	20	1.7	51	21/40	17/40	43
		3	6. 3	8. 22	8/ 1~10/ 5	52	33	2.5	57	11/16	11/16	69
扇	8	5	6. 17	8. 31	8/14~ 9/14	57	27	2.2	63	16/22	6/22	27
		7	7. 1	9. 21	8/21~10/20	57	26	2.1	54	21/24	12/24	50
		9	7. 15	10. 4	9/ 2~10/29	52	24	2.2	49	20/28	19/28	68
		3	6. 3	9. 25	9. 25	64	35	2.0	74	1/ 1	1/ 1	100
明	0	5	6. 17	9. 15	9/ 5~10/10	50	25	2.2	50	6/ 6	5/ 6	83
		7	7. 1	9. 20	9/ 2~ 9/30	46	27	2.8	50	6/ 8	6/ 8	75
		9	7. 15	10. 4	9/25~10/20	49	29	2.7	33	13/20	12/20	60
		3	5. 13	9. 2	8/16~10/ 1	40	16	1.4	67	21/30	20/30	67
錦	14	5	5. 27	8. 25	8/15~ 9/ 4	40	14	1.5	54	43/54	43/54	75
		7	6. 10	9. 5	8/29~ 9/27	42	16	1.9	54	39/50	39/50	78
		9	6. 24	9. 8	9/ 2~ 9/24	41	15	1.7	51	41/59	40/59	68
		3	6. 3	9. 6	8/17~10/10	44	22	2.2	63	13/24	13/24	54
扇	8	5	6. 17	9. 17	8/31~10/31	44	20	2.1	55	23/28	23/28	82
		7	7. 1	9. 22	9/ 8~10/ 7	39	19	2.3	59	14/21	14/21	67
		9	7. 15	10. 6	9/26~10/23	38	17	2.0	55	22/28	22/28	79
		3	6. 3	-	-	-	-	-	-	0/15	0/15	0
明	0	5	6. 17	9. 25	9/24~10/ 3	38	25	3.0	56	2/15	2/13	15
		7	7. 1	-	-	-	-	-	-	0/25	0/25	0
		9	7. 15	10. 20	10/ 9~10/31	45	25	3.0	51	5/19	5/19	26

(清津紅 14°C-3月18日, 8°C-3月31日, 0°C-4月11日 開花の切下球は3~9週間の低温処理では全く発芽してこなかった)

切花長は第一作目の栽培夜温や切下球の冷蔵期間による差は見られない。着花数は第一作目を14°Cで栽培した時、全般にやや少なく、第一作目を0°Cで栽培し、その切下球に7~9週間の冷蔵を行った時幾分多くなった。

切下球からの生育で処理によって大きな差が見られたのは発芽数、発蕾茎数および開花茎数である。第一作目の栽培夜温を高くするほど、切下球の冷蔵時間を長くするほど発芽数は多く、特に栽培夜温を0°Cで管理して得た切下球を3~7週間冷蔵した区の発芽数は少なかった。開花茎数もほぼ同様の傾向を示したが、発芽数に対する開花茎数の割合では、処理による一定の傾向は見られなかった。

明錦は金扇より生育の進みが遅くなったが全体的な傾向は金扇に類似していた。金扇と多少差が見られたのは次の点である。

切花品質では栽培夜温が低くなるほど着花数が多くなった。切下球からの発芽数は金扇と同じく第一作目の栽培夜温が高いほど多くなったが、切下球の冷蔵期間による一定の傾向は見られなかった。また栽培夜温を0℃として得た切下球からは発芽は見られても抽台してこない個体が多く、発蕾茎数や開花茎数が少なかった。

3 考察

試験Iと同様に清津紅、金扇、明錦を用い、第一作目の本冷蔵を2℃で8週間行い、定植後の栽培夜温を14、8、0℃として切下球を得、その切下球に温湯処理や予冷を行わず、2℃の本冷だけを行い、その期間によって生育、開花および切花の品質がどう変化するかを検討した。

キクの二度切り栽培では採花跡の切株のロゼット打破のための低温処理法、GA散布等が⁵⁾、またテッポウユリの二度切りでも、切下球に対する同様の検討がされている⁷⁾。またスカシユリの二度切り栽培では切下球に対する冷蔵処理や温湯処理等が検討され、一定の成果が報告されている⁶⁾。しかし、これらの試験はいずれも第一作目の栽培条件との関連で検討されたものではない。

清津紅の切下球は約30gあり、そこから生育する切花も品質的に期待された。しかし試験期間中は全く発芽せず、これをそのまま無加温ハウス内に放置しておいた結果、翌年の3月下旬より発芽が始まり、4月中下旬には開花に至った。いずれにしても清津紅は第一作目が3～4月に開花した切下球は本冷を2℃で8週間行うだけでは休眠が打破されなかったことになる。しかし別の試験で12月下旬に第一作目を開花させ、その切下球に2℃で7週間の本冷だけを行い100%近く開花させた²⁾。また試験Iでも低率ではあるが開花に到達した。従って清津紅については、第一作目の栽培条件と切下球の休眠性の検討が特に必要であると思われる。

次に金扇、明錦であるが、発芽及び開花時期等で品種間差が多少見られたが、全体としてはほぼ同様の結果が得られ、また試験Iの結果と一致する部分が少なからず見られた。第一作目の栽培夜温は切下球の発芽数に大きな影響を与え、開花茎数にも影響が及んだ。

試験Iは第一作目の球根の冷蔵温度と栽培夜温の関係について検討し、栽培夜温が高い時は冷蔵温度はあまり問題にならないが、栽培夜温が下ると冷蔵温度によって発芽性に差が見られるようになった。

この試験でも栽培夜温が14℃と高く保たれた時、5週間以上の冷蔵であればその期間によって発芽性は変らない。しかし栽培夜温が8℃や0℃まで下がると発芽性に差が生じ、7週間又は9週間の冷蔵期間が必要となった。更に高い発芽数、開花数を得るためには、温湯処理や予冷との組み合わせも検討が必要であろう。また、特に明錦では栽培夜温が0℃となった区の切下球は発芽するもののりん片葉を多数発生させるだけで抽台してこなかったのが注目された。

試験Iで論じたように、切下球の分球状態が調査出来なかったので、栽培夜温と分球数や発芽等については確認出来なかった。

金扇、明錦の開花日は第一作目の栽培夜温が低くなるほど、切下球の冷蔵期間が長くなるほど遅くなった。開花所要日数はどの栽培夜温でも3週間冷蔵で最も多く、7～9週間冷蔵では同程度で少なくなった。切下球の栽培は無加温ガラス室を用いたので、開花期が遅れるほど室温も低下し、それが7週間冷蔵と9週間冷蔵の到花日数を同じくするのにある程度影響したと思われる。

スカシユリの切花としては着花数は3輪は確保したい。金扇では栽培夜温0℃で得た切下球を7～9週

間冷蔵した時 2.7～2.8 輪であり、草丈が 50 cm 前後でやや短かいが、市場性は十分期待出来ると思われた。明錦は栽培夜温を 8℃以下とすると 2 輪以上は着花する。草丈は金扇より更に短かく 40 cm 前後であるが、ある程度の市場性はあるものと思われる。

明錦では 400 球/ケース位の 1 段階大きな球根を第一作目に使用したり、定植時期をもう少し遅くし、日中の高温を避ける工夫をすること、さらに試験 I で論じたように、仕立て本数の制限などによって、さらに高い市場性を持つ切花が期待出来るものと思われた。

摘 要

1 スカシユリの二度切り栽培技術の実用化のために、第一作目の球根の冷蔵温度、栽培夜温および切下球の冷蔵処理期間が切下球の発芽、開花及び切花品質に及ぼす影響について検討した。

2 清津紅は一部開花まで到達したものの、全く発芽しない場合も見られ、今後休眠打破法の検討が必要であると思われた。

3 金扇、明錦についてはほぼ同様の結果が得られた。

① 切下球からの発芽数、開花茎数は第一作目の栽培夜温の影響を強く受ける。夜温 14℃では、第一作目の球根の冷蔵温度や切下球の冷蔵期間を 5 週間以上とすれば、発芽や開花茎数に影響しない。しかし栽培夜温を 8℃以下に下げると、第一作目の冷蔵温度の影響が生じ、5℃冷蔵で発芽数が減少し、また切下球の冷蔵期間も 7 週間以上を必要とする。また切下球の冷蔵期間は温湯や予冷も含め更に検討を要する。

② 切花品質は第一作目の栽培夜温が低いほど良く、金扇は冷蔵温度 5℃で着花数が多かった。

③ 金扇、明錦ともある程度の市場性は期待出来るが、切花品質向上策について更に検討が必要と思われた。

引 用 文 献

- 1 浅野 昭・高津 勇. 1981. スカシユリの二度切り栽培に関する研究(第1報)第一作目の栽培条件と切下球の肥大性及び発芽, 生育. 昭和57年秋, 園芸学会発表要旨. 342～343.
- 2 茨城園試. 1981. スカシユリの二度切り栽培法, 切下球利用による5～7月開花. 昭和56年度, 花き試験成績概要(関東・東山地域). 野菜試験場編.
- 3 茨城園試. 1983. スカシユリの二度切り栽培(2), 第一作目の栽培夜温と切下球の発芽, 生育. 昭和58年度, 花き試験成績書.
- 4 岡田正順編. 1970. 実際花き園芸(1)切花, 地球出版. 東京. 552pp.
- 5 掛谷 隆. 1975. キクの二度切り栽培に関する研究(第1報), 未電照ギク跡のロゼット打破, 日長処理, 栽培温度の関係. 昭和50年春(中・四国)園芸学会発表要旨. 437.
- 6 高知園試. 1982. スカシユリ切下再利用技術確立, 冷蔵期間が発芽に及ぼす影響. 昭和57年度, 花き試験成績概要(西日本), 野菜試験場久留米支場編. 67.
- 7 高知園試. 1983. テッポウユリの二度切り栽培に関する試験. 昭和58年度, 花き試験成績書.
- 8 戸定会編. 1964. 球根(養成・切花・鉢栽培)の新技術. 誠文堂新光社. 東京. 320 pp